

りに走った。

本隊の迎えを受け、宿舎に帰り着いたのは残念ながら記憶にない。朝になってのどの痛みで目覚めた。全身に痛みを感じ、力が抜けて動けない。生の喜びと戦死させた二人の戦友を思う悲しみ、大きな涙が次から次へと止まらなかった。

丘の戦闘は野砲の参戦でやっと夕刻には終わったと聞く。敵は大部隊だったのだろうか。その夜も死んだように眠った。次の早朝、敵の去った跡に急行し、二人の遺体を収容、荼毘に付して、二基の墓を作った。本隊はすでに本来の輸送任務について前進しているだろう。ニガニガしい敗走の思い出、忘れられるなら一刻も早く忘れてしまいたい。

## ただ一途にお国のため

福井県 柴田 伊左衛門

大東亜戦に遭遇して

昭和五年満二十歳で私は徴兵検査を受け、第二乙種で第一補充兵役陸軍輜重輸卒（服役期間十二年四か月）に編入となった。そこで直ちに在郷軍人会に入会「教育勅語」中の

一旦緩急アレバ義勇公に奉ジ以テ

天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ

を精神としてその覚悟を新たににした。

そのころ我が国の外交関係とみに悪化し、ついに昭和十六年「宣戦の布告」となりさらに戦陣訓が出されて、その一節に

夫れ先陣は大命に基き、皇軍の神体を發揮し、攻むれば必ず取り、戦へば必ず勝ち、云々……  
生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すことなかれ

と書かれており、未入営補充兵ながら何かしら奮いたたされたものである。

やがて国を挙げての戦時態勢に突入、町では防空演習から灯火管制など訓練が繰り返され、特に私は教育召集とて、敦賀連隊に三泊四日の宿泊訓練もあって大いに武

力を養った。

昭和十八年五月十九日夜、ついに私に臨時召集の令状が着た。

到着日時 昭和十八年六月一日 午前十時

到着地 京都府福知山町

召集部隊 中部第六十三部隊

敦賀連隊区司令部

この時、数え年三十四歳、この紙が戦時下に出された俗に『赤紙』であり、また否応なしに引っぱり出されるということ、『涙の召集令状』ともいわれた。

戦争にも一度行ってみたい、お国のために尽くしたい、勿論あこがれの星（入隊すれば先ず一つ貰って二等兵）もつけてみたい、その上勲章にもありつきたい

など若干のあこがれもあり、名譽であり、また嬉しさも幾分あったが、しかし多分の不安は到底ぬぐい切れなかった。

しかしお召しの赤紙はもう受けてしまったのだ。出発の日限はあと十二日、まず日の丸の国旗に『武運長久』

の寄せ書きを人にたのむ。妻は木綿の腹巻に千人の婦人たちに縫い込んでもらう『千人針』、これを腹に巻けば敵の弾丸よけになる。さらに常日ごろ信仰する寺社に参拝してお札を受けに走って回る。

いよいよ五月三十一日自宅出発、このとき母（育ての母）は六年前に死亡していなかったが、数え年八十五才の祖母がいて、この別れが実に寂しかった。この祖母は翌年十二月本土空襲の最中に死亡することになる。

あれやこれやと考えるうちに涙があとから、あとから流れ出る始末、いや応なしに祖母・父・妻と二歳になっていた長女の四人を家に残して出る。親類縁者は早朝より家につめかけ、戸外では見送りの区民・大政翼賛会・軍人会・青年会・国防婦人会の方々がつぎつぎと集まってなかなか賑やかである。

青年訓練所の制服に赤ダスキ姿で家の前に立った私、この時の心境実に万感こもこも、言葉にはいい表わすことも出来ない一瞬。

区長の励ましの言葉に承えて『一死報国』の決意を披瀝し、万歳の三唱があつて出発、『祝出征軍人 柴田徳

蔵君』の大幟が先頭に立つ。町役場前でも応召兵四人集まり、ここでも『一死報国』を誓い万歳と軍歌に送られて小浜駅へ、見送りで雑沓する中を通りぬけて乗車した。汽笛が鳴り万歳万歳の歓呼の声は天に響き列車はゆっくり動く。背負われてきている長女の幼な姿をチラッとみた途端あふれでようとする涙、しかし大勢の人の目・・泣いてはいられない。目をそらすうちに列車はトンネルに入る。

この後、福知山連隊に入隊、初めて二等兵となり厳格な訓練を受け、十八年八月十六日、宇品港より貨物船に乗せられシンガポールに九月十三日上陸。続いてマレー半島を通過し、ビルマの首都ラングーンに駐屯する陸上勤務第九十四中隊に入隊、兵站業務に従事した。

昭和十九年四月には、ビルマ方面軍司令部参謀部電報班に転属し、二十四時間勤務という激務に携わり、その間司令官閣下に随行して前線の戦闘司令所へ危険を冒して出張もした。

二十年八月十五日の終戦を迎え、二十一年七月に、出征してより三年一か月目の復員、懐かしのわが家へ入り、

成長した二人の女の子をつくづく眺め、畳の間に落ちつき仏壇に向かって手を合わせた。実に長い間留守を守ってくれた老父と愚妻にはただ感謝するのみ。ここに初めて安堵の胸を撫でおろした。

#### 銃後を守る苦しみ

私が出征したあとの昭和十八年十二月には次女が生まれた。そのころより衣料品から食糧品などが不足し始め、その上、収入もなく追い追いの品も配給制度となる。

戦争物資も不足をきたし大砲や弾丸にするためにと各寺院の釣り鐘が、また家宝の刀剣は前線で使うためにと、いずれも供出させられた。

しかも野菜物の不足のため妻など、裏庭はもちろん中庭にまでカボチャを植えたり、さつま芋も作って今まで食べたこともない芋のじくまで食ったりしたが、この習慣は戦後にまで続いた。

なお衣類なども買えないため、土蔵にしまっていた昔の着物を出して子供たちのヒザ当てにしたり縫い直したりして間に合わせていた。さらに塩まで不足をきたしたため、海岸へおりにて海水をくみ塩も作ったという。

敵の本土上陸を前提として町内会として竹槍の稽古に婦人は全部出よとの厳命。あるいは戦勝祈願から、前線へ送るための慰問袋を町内まとめて作成などと休む暇もない。

その上軍用機滑走に使用する松根油不足とて、町内会一戸に一人ずつ松の根掘りに出よとの厳命。年寄りと幼児二人かかえているのと、せめて出征軍人家族は許して欲しいと断わったが、その嘆願は全く聞き入れてもらえず苦しい中をただお国のためと出動したという。

銃後の苦しみを一部申し上げて稿をとじます。